
初めての小説1

M.cor

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

初めての小説1

【Zコード】

N8057Z

【作者名】

M·cor

【あらすじ】

引きこもりの神崎翔

彼が学校に行かない理由は

担任が嫌いだから

久々に参加した宿泊学習で

翔にまさかの出来事が襲い掛かる！――

始めて投稿しますが

優しい目でみて下さいwww

初めての小説

「はあ、はあ、」

僕は息を荒くしながら遙か先を行く友達を見ていた
「こ……こんなにキツイなんて……母さんめ
騙したな……」

僕の名前は神崎翔かんざきしょう

学校には滅多に行かない、言うなれば引きこもりだ
僕が学校に行かなくなつた理由は、
イジメだと、勉強について行けないと
成績が悪いからとか、
そんな理由ではない。

友達だつているし、通信学校で

今勉強も理解で来ている、

成績だつて悪くない……どちらかと言つと平均だ。
じゃあなぜ行かないのか……

完結に言つと、担任が気に食わない

担任の名前は新島ハジメ

名前がハジメのくせに、時間がたつても授業が始まらない。

教えてくれる勉強なんて説明が下手過ぎて

クラスのほぼ全員が「何を言つてるか分からない」と言つ顔をしている

まあ、そんな話はどうでもいい、前の話に戻ろう

僕は今山道を歩いている

学校行事の宿泊学習なのだ

引きこもりの僕がこの行事に参加した理由は
わかる人はわかるのでは無いだろうか

そう、僕の担任の先生が腹痛でこの行事に

参加していないのだ。

「今日新島いなくて良かつたな！！」

僕と一緒に遅く歩いていた

山野勇気が話しかけてくる

こいつは、学校に行つていない僕に

プリントや学校であつた出来事を教えてくれる

でも、たまに何の用も無く遊びに来るから

何かめんどくさい

「ああ、そうだな」

面倒なので軽く受け流す

「おいおい、今面倒くさいとか思つてただろーーー！」

……人の心を読むな

「うん、思つてる」

「…………ちゅ…………そられは無いだろ…………」

あまりにもショックだったらしく口が回つていな
やつぱり面倒くさこので、せつせと歩く

「ああ、もう、嘘だから、な？落ち込むなって」

勇気の顔に笑顔が戻る

「だよな！俺らの友情は不滅だよな！ーーー！」

……やつぱりほつとけばよかつた

キャンプ場到着

向かう先はもちろんキャンプ場

疲れる事がたくさんあんのに

「そんでも、うらのやうなのがな……」

「お前さ、少し黙つてくれよ 疲れるから」

アーティストの静かなる世界

もう僕の班の奴はおそらくキャンプ場に着いただろう

僕ももうすぐ着くはずだ

後この坂を登り切れば川が見える……はずなんだが

「あつれえ、ここに川あるはずじゃね？」

なあなあ翔
ここのはすなんたよな

「ウルセラエエエエエエ」

んな事わかつてんだよ道に迷つたんだよお前のおしゃべりのせいで
道間違えたんだよどうすんだよつーかこじりだよわからんねえよ川
が見えるはずなのに何で田の前吊り橋なんだよ下は川じゃなくて普
通に崖だぞお前のせいでみすつたんだよまつたくじりしてくれんだ

僕つてこんなに肺活量あつたんだ
つれながうじつくり

卷之三

あ…やべ…

言い忘れてたがこの勇気と言ひつ男
むつチャ泣き虫なのである

「あー、何でも無い、道戻れば何とかなるだろ
ほら、行くぞ」

「あ…うん」

よかつた、急過ぎて状況が読み込めてない様だ

ええっと、ここを戻つて、ここにデッカい木があつた、んでここを右に曲がって進めば

元来た道に……出ない

「なあ、ここも違うんじゃ無いか？」翔

「どうやらその様だな……なあ勇氣、どうする？」

あえてシンプルで難しい質問をしてみる

「さっき来た吊り橋のとこまでもどつて

今、結構暑いじじめてるから

少しくらい足跡が残つてのはずだから

それたどつてある程度まで戻ればいいんでね？」

むつちや真面目な答えが帰つて來た。

「そりだな、そうしてみるか

まあ、無理だろうけど」

そしてチャレンジ

20分後

目の前は川

奥には炊飯処

うん、着いた

「おーーーい、神崎、山野、遅いぞーーー
遠くで女子が叫ぶ

「相変わらずうつせえよな智子は」

今叫んでいたのは河原智子、僕と勇氣と同じ班の班長だ、女のくせに馬鹿力なのがちょっとね

「あー、ごめん智子

勇気が腹壊してトイレ探してたら遅れた「適當な説明を言つてみる

「ええええええええええええ？！？！？！？」

すつとんきょううな声をあげて勇氣の顔が赤くなる

「ははははは、マジか勇氣、

腹壊したのか、ケツサクだ。ははははははは

笑いすぎだと思うぞ智子よ……

「翔、それは無いだろ~

ここまで来たの俺のおかげだろー」

僕は急いで勇氣の首を掴み耳元でわざやく

「ばつかやう、

んな事智子にばれたらなにされるかしんないぞ
あの嘘はしようがなかつたんだよ」

何とか無理矢理、理解させた

「あ～、なるほど、よし、何とか誤魔化そう」

よしつ成功だ

「ん～？どうした二人とも」

「いや、何でも…」

「いやあ、腹痛くなっちゃってさあ
参つたよ、トイレ見付けたんだけどね
紙が無くてさあ、落ちてた葉っぱで……」

ベキイツツツツ

「のほづ……」

勇氣、空を飛ぶ

「女子の前で何言つてくれてんだ……ああ？」
ボコられない様に嘘を着いたのが裏目でた様だ
すまん、勇氣

「い……いや……これには訳がああああああ

僕は何も聞いてない

何も見てない

何も知らない

智子の恐怖

しばらくして、僕は今テントを建てている

カン カン カン カン

「ああ、指いつてえ、しかもじめつてるから
足場わりいし……」

などとブツブツ独り言を言いながら

一人寂しくテントを建てている

「なーに独り」といつてんですか！！

こんな時ほどファイトですよ、翔さん…………」

こいつは、橋本明日香（女子）

背は小さくてすばしつこい

この班の和ませ役なのだが、

なぜか同じ年なのに

僕を翔さんと言つてしたつている

しかも敬語で……

しかも皆に……

「ほれほれ明日香、あんたの大好きな翔くんは
テント張つてんだから、あんたは料理手伝いな」

「ん？ 智子さん、今何か変な事言ひませんでしたか
何かこう… つつかかる様なかんじの言葉が…」

大好きな翔くんが、と言つところが

引っかかっているのだろう

「ん～？ い～や、なんにもお～」

お玉をクルクル回しながら

二口二口して炊飯処にもどつて行く

「ちょっと待つてくださいよ…………」

その後をすごい勢いで明日香が追いかけて行く

……疲れる……ひどく疲れる

それなのに勇氣は……

「おつほおーー

んまそー、食べちゃお」

智子の皿を盗んでつまみ食いをしている

「智子さん

ご飯炊けましたって…………あれ?

ここにあつた兔リンクゴ一つもりなく無いですか?」

「ん~? そういうや一個足りないな……ん?」

シャク シャク シャク

「なんの音ですかね……

あ——————勇氣さん? ! ? !

やーー、見つかってやんの

「んぐ! ? やつべ? ! ? !

急いで逃げるがもう遅い、

先回りしていた智子に捕まつた様だ
「よくも食いやがつたなああああああ
大変だつたんだぞこらああああああ
ベキイイイイイイ

勇氣空を飛ぶPart2

それはさておき、あんな事やつてる内に
テントが出来た

いまの現状をわざと聞いていてみる

「んー? 勇氣どうしたの?」

何があつたのかもちろん知つてゐるが
いたずら半分で聞いてみた

「しょーー

たすけてくれえよお」

勇氣が泣き声になりながら走つてくる

スツ

横にかわして

ガツ

はい、足掛け

ズベエエエエエエエエエエ

はい、顔面こすり

「ふー」ああああつつ

翔くん……ひどいよ

ね

やべ、気絶しちまいやがった

「ちょっと来てもらお～か?

ゆーきくん?」

氣絶しているのも関係なしに首元をつかんで引きずつて行く

智子……お前つて一体

智子の恐怖（後書き）

れ、

智子に捕まつてしまつた勇気くん
彼の運命やいかに

明日香のカレー

「はい、翔さん、大盛りです！！」

明日香がよそにてくれたのが

卷之三

「どうぞー遠慮しないで食べて下さい

二十一
ノルマの定められて

「ナリ」と「ナリ」の二つを並べて書く。

「ん？ ああ、智子か！」

卷之三

そう言って後ろから引つ張つて来たのが

え
だれ?

無事の口號

ん
ん
?
?
?
?
?

もしかして
勇気なのかな

感の感の観一叶

「んあ？ああ、そうだよ

セ・ト・ソ・ト・ソ・ト・ソ・ト

「アーティストの誕生日」

だよなあ、そう思つよなあ

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

「あつ！ 馬鹿、勇氣！」

僕と智子の声が重なる

「…………ぐつ…………ぐえおおおおおおおおおおおおおお

食わなくて良かつた

でもこんなに吐くなんて……

「ひりああああああ、てめえ

明日香が作ったカレー、何吐いてんだよ、おーい?

え…カレーだつたのか

「い…いや、だつてこれ甘い……」

ああ、馬鹿勇氣め、何も言わなければいいものを

黙れええええええええええええええええええええええ

ベキイイイイイイイイイイイイイイ

勇氣空を飛ぶP a r t 3

「ぐおわああああああああああああ
いやあ、あんなに飛ぶと死んじまうぢや

推定3 m

ドサツ

あ、落ちて來た

「ちっくしょおよくも、智子、へりええええええええ

あ、殴りかかった、馬鹿

スツ 簡単によけた智子

ヒュッ 足を上げた智子

ゴキイ はい、クリーンヒット

「ぐええええええ、は……腹が……腹があああ

そりや痛えよな…哀れ勇氣よ

智子に勝てるわけ無いだろうが

「ばあか、うちに勝てる奴なんかいねえよ

あ、自分で言った

まあ、ともかく、明日香がつくったカレー?

は、食えないと言つ事がわかつたので、
もう食わない事にする

「なあ、翔は食うよなあ？」

わざとらしく智子が微笑む。怖えよお

「も…もちろんさ、く…食つに決まつてんだろ」

自分でも思いもしなかつた言葉が出てきた

しかし言つてしまつたのだから取り返しが付かない

ガツ ガツ ガツ ガツ

とにかく口に放り込む

ここに吐いたら勇氣と同じ末路になつてしまつ

「ぐ…うま…うま」…くつ…かはつ…

うん、うま…かはつ…くえつ…うんうま」…」

ポンつと肩を叩いた智子、そして小さい声で

「よく…よく耐えた…」

と…智子が泣き田になつてゐ

「つむもさ、明日香が料理下手なの知つてたんだ

え…じゃあなんで作らせたんだ…」

明日香のカレー（後書き）

ありえないカレーを食べた
翔くんと勇気くん
これから彼らは
どうなつてしまつのか
それは
次回のお楽しみwww

山中遭遇

れて、
飯もすませた

トイレも行つた

これでこれからハイキングは問題ない…
と、言いたいところだが、
大丈夫じゃ無い奴が約1名…

「ううう、まだきぼちわる…」
わつきのカレーがまだきてるようだ…

「ほーら、はやく行くぞー」

そんな勇気の事はほつといて

さつさと行く智子と明日香、
相変わらずひでえ奴だな、

「おーり、勇氣いくぞ〜」

とにかく早く行かなければまたはぐれる

「わがつだがらぬらざないでええええ」

「ぬおつ?ー、吐くなら言え」の馬鹿
ベシッヂッヂ

しまった、思いつきり後頭部を殴つてしまつた。

ああ、じれつたい

とにかく揺り起こして急がねば
「おい、勇氣早く起き……」

「「やああああああああああああああああ
声にならない叫びとは」の事だろつか…

あれは智子?それに明日香?
何で叫んでんだ?おふざけ?

それにしては、度が過ぎるとゆうか……

「…………今、の声誰？」

「おお、勇気が起きた

「いや、それが、智子と明日香みたいなんだ」

「え？あの智子が叫んだの？まさかそんな事……」

ダダダダダダダダダダダダダダ

先に行つていた明日香が血相をかかえて走つて来た

「はあ……はあ……はあ……し……翔……さん

はやく……早く来て下さい……！」

息を切らしながらただ事では無い様な不陰気だ。

「ど……ど？何があつたのか？」

取り合えず今の現状を詳しく聞いた。

明日香の言う事だと

先に行つたはいいが、地図のとつり進んでも

目印がなかなか見つからず

引き返そうとしたら

何者かにいきなり襲われかけたのだとゆう

「まじか？それやっぱくね？」

急いで行くぞ勇気

「おつ！任せろ」

「明日香、案内しろ……」

「はこつ……！」

とにかく急がなければ、智子に向かが起きていく
急げ……急げ……急げ……

「…………の先です……！」

明日香が指をさすのは…………？

「お……おい、明日香？これ……何？」

「え？何つて…………？！ひつつ……！」

明日香の顔が引きつった。

そもそもどうだろ？

太い木の棒をもってしゃがみこんでいる智子がいる
棒には血がついている

その数m先には倒れた人がいる…

きっと、もう死んでいるだろう、

「おい…智子？　一体何があつたんだ？」

とにかく何があつたのが聞きたい…

すると、智子は死体を指差し震えた声でこう言つた

「こいつ……人間じゃ無い」

あの智子が、さっきまで笑っていた智子が
力ずよい智子は、もう、そこにはいなかつた
ただ何かに怯える、まるで小さな少女の様に…

山中遭遇（後書き）

いきなり現れた謎の人間
こいつは一体何者なのか
次回に続く

翔の戦い？

とにかく僕は、怯えて震える智子をなだめ
その倒れた死体に歩み寄る

……………
酷いざまだ……

顔面は碎かれ、顎がどこにあつたのかが解らない
目は両方とも別々の方向に向いている
これ以上は見ていられない
だけど、もしかしたらと思い
脈を見てみる

……………トクツ

? ! ! ! ? ! ! ?

僕はあまりの驚きに後ろに飛び退いた
何だ今のは、死んでいても可笑しく無いのに
なんで脈が動いているんだ?

とにかくわけが解らない

そう思い、智子の元へ行こうとした……

次の瞬間

ガシッ

足を掴まれた

「うわっつ？！？！」

そのまま僕は地面に倒れこむ

ウウツツ

ウアアアアアアアアアア

さつきまで倒れていたのに……
死にかけていたのに……

歩いている
動いている

「おい！翔！！！ボーッとすんな…！」

勇気が言い終わると同時に

あの太い木の棒を持つて

智子が突っ込んで来る

「うああああああああああああああ…！」

力一杯木の棒を振り下ろす

ゴツ　……グシャツツツツ

頭が吹き飛ぶ

返り血が智子の顔を紅に染めていく

「あ…ありがとう…助かった」

そうお礼を言うと、智子の手を引いて

勇気たちの元へ戻る

明日香は勇気にしがみつき泣いている

勇気はその明日香をしつかり抱きしめている

はたから見れば、兄妹のような物だ

「皆無事だな？よし、取り合えず

キャンプ場まで一日戻ろう」

急な事で皆がパニックになつていて
しかし、何故こんな事が起きたのか

疑問点は3つ

1つ　なぜいきなり襲つて来たのか

2つ　どうしてハイキングコースに居たのか

そして3つ目は、どうしてあの状況で生きていたか

この3つが疑問だ。

いきなり襲つて來たと、明日香は言つていた。
なぜ？なんのために？

それに、このハイキングコースは
先生達が危険は無いかあらかじめ調べていて
今日は貸し切りで誰もいなはずなのだ。
……そして、1番の疑問……

どうして、顎が碎かれ、
目も正常に見えていない人間が
いきなり襲つて來たのかだ。

人間は、自然死以外の死に方
つまり、他殺や溺死などでは、
よく、目が別々の方向を向いている事がある
あの砕け方ならば、
一瞬で即死になつても可笑しくは無い

僕はキャンプ場に向かいながら
ずっとその事だけを考えていた
ゲームや映画でよくある事……
とも考えられるが、あれはウイルスによる物で
感染していくのだ、しかし第一に
僕らも、キャンプ場にいた、別の班の友達も
誰もそんな事にはなつていなかつた。

しかし、僕らはまだ
これから起きて、最低最悪の悪夢があるとは
誰もきづいてはいなかつただろう……

翔の戦い？（後書き）

しんでいたはずなのにいきていた
こいつはなんなのか

次回を

お楽しみに WWWWW

ザクツ…ザクツ…
湿つて いる山路を、
皆が いる キャンプ場に向かって歩く

まさか あんな事に
なるなんて……

「 なあ、 翔 …」
「 なんだ? 」

氣の重 そ うな 感じで、会話 が 弾ま ない
「 さつ き智子 が 殺した やつ …」
あいつ、 6組 の 貴之じや ないか?
6組 の 貴之 … 学校 で いろいろ 面倒 を 起こして いる
… 言ひならば 問題児だ

「 ふざけ てんのか ? 勇氣 …」
あんな 事が あつた 後だから
皆 ピリ ピリ して いる のだ

「 貴之 な訳 ないだろ、何 で あいつ が
智子 や 明日香 を 襲う んだ? 」
あまり そ う 言う 様な …
誰か を 疑う 事なん て し たく ない

… カツン …
… 何 か が 足に 当たつた … 「 これは … 鉄パイプ ?
「 護身用 に 持つと くか …」
僕は 鉄パイプ を 片手 に 握りしめ 先頭 を 歩く

しばらく 歩いて、 キャンプ場 が 見えて 来た

「お、これ、

キャンプ場の方では、明るい灯りがついている

ん?

「龜山はいつの間にか？」

備考一と行つてくれば、

勇気が一目散に走つて行く

僕らも行こう

智子と明日香に声をかけ

講義でヤンマー場に向かう

キャンプ場についた

「なんだ：これ」

僕らは絶句した

あたり一面か
血と火の海だ

ああああああああ

東方文化

「うめの三郎」

失ペイプをつかひ屋

誰かしるのか?」

恐る恐る聞いてみると、応答は無い
ため息をついて気を抜いた瞬間

火の中から燃え盛る人間が飛び出して来た

しかも……1……2……3……4……5……
え？ 多くね？

「おら！ 翔……ボーッとすんな……！」

智子が木の棒を持つて応戦して来た

「馬鹿野郎！……危ねえから引っ込んでる……！」

「断る……！」

……即答かよ

「んじゃあ、足ひつぱんなり……！」

「お前もな！……！」

……また即答

「つおらああああああああああああああ……！」

ベキイイイイ

「まず一匹田^{タケ}」

シャアアアア……

「うわつっ……！」

「ボーッとすんなつったのはお前だろうが……！」

グシャツツツツ

「よつしやあ、どんどん行くぞオラアアアア……！」

何でだろうか、こんな状況なのに

無茶苦茶楽しい

「オラオラオラオラオラオラオラアアアアアアアア……！」
ベキッ……グシャ……ガスツツ……！」

「ふう、何とかなつたな」

全身返り血まみれの僕を見て
明日香が泣き出す

「まひまひ、泣くんじゅ無いよ、明日香
「ヒック…グスッ…でも、さああああん…！」
んなあおげさな

とにかく朝まで安全を確保しようと
僕らは、テントを移動して
そこで夜を過ごす事にした。

5 vs 2（後書き）

夜をテントで過ぐる事にした
翔くん達
しかしこの選択が皆を危険に晒してしまつ
次回に続くwww

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8057z/>

初めての小説1

2011年12月26日22時56分発行